



Title	Th・ムントにおける文芸学のはじまり
Author(s)	佐々木, 直之輔
Citation	明治大学教養論集, 130: 49-60
URL	http://hdl.handle.net/10291/4887
Rights	
Issue Date	1980-02-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

Th.ムントにおける文芸学のはじまり

佐々木 直之輔

文学の領域にだけかぎられるわけではないが、文学上の様々な方法論、方法的意識は単なる流行である場合もあろうが、大抵の場合その生れた時代の精神と無縁ではありえないし、むしろ時代精神がその方法的意識を可能にしたと言つてよいのである。例えばシェーラー (W. Scherer) に代表される文学上の実証主義的意識も、当時の自然科学の飛躍的發展と、自然科学およびその方法に対する信頼の意識と無縁ではなかったのである。言うまでもなく、方法論のみではなく、むしろ詩人およびその作品こそ、芸術は時代を超えるという主張は他方で可能であるとしても、厳密には生れ育つた時代および民族の子なのである。

第二次大戦後、ドイツ文芸学において主張された、また主張されている方法論をひろいあげてみても、解釈学派、構造主義の立場からの方法論、言語学の観点からのテキスト言語学、多少ともマルクス主義的色彩をおびた文学社会学等々、様々な方法的意識がある。いわゆる方法論の相対主義の時代であろうが、それらもそれぞれ生れるべくして生れたものであろう。詩的作品は、ある一つの方法論で事足れりとするわけにはいかないものなのかもしれない。

文学上の方法的意識、あるいはむしろ文学の学的研究意志がいつ生じてきたかという間には軽々には答えられないが、ドイツにおいてはおよそローマン主義時代であるとは言えそうに思う。それは例えばシュレーゲル兄弟の活動の時

代であるが、それはまたドイツの歴史学派の誕生の時代でもあった。つまり啓蒙主義時代の合理主義的歴史観を克服し、歴史の有機的連続を主張し、歴史にあらわれた民族性を把握せんと努める潮流の誕生である。例えばレッジング、ヘルダーあるいは『詩と真実』の第七巻におけるゲーテの場合のように、個々に文学の研究がそれ以前になかったわけではないし、そして例えばマールホルツ (W. Mahrholz) は『詩と真実』の第7巻の記述を「17世紀18世紀に於るドイツ文学の発展過程の学的記述としては最初の試みなのである」と言っているが、文学の学的研究の潮流はやはりローマン主義時代を待たねばならなかったであろう。理由は種々あるのではあろうが、シュレーゲル (Fr. Schlegel) の『古代および近代の文学史』 (Geschichte der alten und neuen Literatur 1812。以下たんに『文学史』とする) をはじめとし、当時さまざまな文学史が書かれたことが自ずから語っているように、歴史学派の抬頭とあいまって文学の領域でも歴史的なものの見方がはじめて客体を対象的に見ることを可能にし、そこから文学の学的研究が生じてきたと言えるのかもしれない。もちろんそれ以前に歴史的意識がなかったわけではなく、例えばヘルダーには強い歴史意識があり、『人類史の哲学のための諸理念』 (1784—1791) を書かじめはしたが、人類の誕生や惑星にまで至るその計画は余りに遠大すぎるものだった。

文学史の学的記述はゲルヴィーヌス (G. G. Gervinus) の『ドイツ国民文学史』 (1835—1842) にはじまると言われるときもあるが、およそ時を同じくして何人かの人達によって文学史が書かれている。メンツェルの文学史は1827年、アイヒェンドルフの文学史は1857年である。そして1842年には、一般には若きドイツの一人とされ、その『ドイツ散文の技術』 (1837) で知られているムント (Th. Mundt 1808—1861) の『現代文学史』 (Geschichte der Literatur der Gegenwart) の初版が出版されたのである。

書誌的に確認されるかぎり、「文芸学」 (Literaturwissenschaft) という表現をドイツではじめて用いたのはこのムントであろうと言われている。この表現においてかれが理解したものが、どのような形で後世の文芸学に影響を与えたかは詳らかにしないが、この表現でかれが何を理解しようとしたかを知ること

は、文芸学研究の無意味な一歩にはならないであろう。そしてかれの方法的意識も当時の時代精神と無縁ではなかったのである。

1

文芸学という表現をはじめて用いたのはムントであろうとはよく指摘されることであるが、しかしこの点に関してドイツにおいても一つの誤謬が広くおこなわれている。例えば „Deutsche Philologie im Aufriß“ にも「文芸学の概念は1840年頃抬頭した——最初に確認されているのは1842年の Th. ムントの『現代文学史』の序文においてである」旨が示されているが、⁽⁵⁾ 事實はそうではない。⁽⁶⁾ 1842年の『現代文学史』にはそもそも序文はついておらず、文芸学の表現が初めて用いられたのは、1853年の第2版『現代文学史』の序文においてである。

初版の『現代文学史』はもともとさきのシュレーゲルの『文学史』の第2部として上梓されたものである。アイヒナー (H. Eichner) によるシュレーゲルの „Kritische Ausgabe“ 第6巻にも、シュレーゲルの『文学史』に関して、「1841年、ベルリンの出版社 M. Simion から1巻本で第1稿の翻刻がでた。第2巻 (ベルリン 1842) はシュレーゲルの文学史の Th. ムントによる続編を⁽⁷⁾ 含んでいる」として示されている。シュレーゲルの文学史は「ムントによって極く最近に至るまで続行された」⁽⁸⁾ ののである。

ローマン主義時代をもって「芸術時代の終焉」を語り、それ以降は別の時代がはじまり、ローマン主義者達と若きドイツの間には深い断絶があると把えるのが一般的理解であり、若きドイツの人達が古典主義、ローマン主義を論難じたこともよく指摘される事実であるが、若きドイツの一人とされるムントが、ローマン主義の代表的存在であるシュレーゲルの『文学史』の第2部を書いたという事実は、少なからず奇異の感を我々に与える。如何なる経緯でムントが第2部を書いたのかは、残念ながら現在のところ知ることはできないが、何らかの内的、外的要因があったのであろう。ムントの文芸学の概念は入るに先き⁽⁹⁾ 立って、ムントの『現代文学史』でシュレーゲルに関する記述を見ることには

るて、ムントがシュレーゲルをどのように扱っているかをまず見てみたい。それによって、第2部を書き続けた内的要因は多少とも明らかとなるであろう。

シュレーゲルはその『文学史』を通して世界文学的見解をもっとも包括的に記述したとムントは扱え、初版の『現代文学史』で次のように言っている。

「我々はそうした一貫した取り扱いのなかで、文学にあらわれた国民の生の全体をみせようと努め、文学史を書くことによって同時に、ヨーロッパの精神文化の世界史的マンドラ (ein welthistorisches Gemälde der europäischen Geistesbildung) を目的としたドイツ最初の批評家とシュレーゲルをみなさざるをえないのである。それ以来こうした意味で、『ヨーロッパ的』という言葉はかなり濫用されたとはいえ、ローマン派がまず第一にこうした関係でこの言葉を通用させ、そのなかで諸国民の文化の一番新しい時代に最もよく適合する文学史のあの論述を述べたということは、やはり特別の功績としてローマン派に帰せられねばならないのである。文学の展開の記述にさいしてシュレーゲルの足跡を歩もうとするならば、こうした関係で、今日でもなおこの正しい模範に従うことになるであろう。」⁽⁹⁾

ムントはこのようにシュレーゲルを評し、こうした前提に立って第2部を書き始めるのであるが、以上見たかぎりではムントとローマン派、あるいはシュレーゲルとの間に特別の齟齬は存在していないように思われる。そして11年後の第2版においてもシュレーゲルは、「この驚くべき仲間 (ローマン派のさど——筆者) のなかで疑いなく最も意味の深い、最も普遍的頭脳である」と⁽¹⁰⁾扱われているが、第2版においては、シュレーゲルの『文学史』はすでに歴史的な取り扱いをされているように思われる。「どれほど多くのぞんざいな点、すきまだらけの点、混乱した点をこの講義 (『文学史』は講義である——筆者) が個々の点で示していようと、この講義は、他の似たような著作とちがって興味をそそるものであり、意味深きものであったし、諸国民の文学を貫いている大きな精神的絆をはっきりと示し、関連させつつ結びつけたのである。この講義を通してはじめて、ドイツにおいてより高度の文学史記述が基礎づけられたのである」⁽¹¹⁾と述べて、賞賛しつつもシュレーゲルの『文学史』に対する若干の

批評もおこなっているのである。

さらにムントは、シュレーゲルのこの講義における文学解釈と記述の本質的
ライトモチーフとなっているのは、近代の文化と学問の出発点としての宗教改
革からの回避であると捉え、シュレーゲルの根本的考えはカトリック文学の基
礎づけであったと言っている。そしてシュレーゲルの考えでは、このような文
学において、哲学、歴史、文学が聖書とキリスト教の伝統の源泉から導きださ
れるべきものであり、またその源泉に帰せしめられるべきものであった。こう
したムントの記述からしても、シュレーゲルは明瞭に歴史的なものの見方を持
っていたと考えられるが、しかしムントは、シュレーゲルの世界史の構築は哲
学的、体系的基礎づけを欠いていたし、「歴史を動かすはずの本質的原理自体⁽¹²⁾
はあいまいなままであると捉えているのである。

以上のように、ムントの『現代文学史』第2版においてシュレーゲルは多少
とも批判にさらされてはいるが、第1版においても第2版においても、シュレ
ーゲルおよびその『文学史』は大旨は好意を持って受け取られ、高く評価され
ているように思われる。したがって如何なる経緯かは未詳ながら、ムントがシ
ュレーゲルの『文学史』の第2部を書き継ぐ精神的余地は十分にあったであろ
うし、シュレーゲルの『文学史』がムントをして『現代文学史』第2版を書か
しめ、直接にはではないとしてもその序文で「文芸学」という表現を使わしめた
と言いうるかもしれない。ムントはあるいは、シュレーゲルの文学研究に文芸
学をみていたのかもしれない。

2

第2版の序文によれば、ムントの文芸学の語るところは次のようである。第
2版は新たな改訂版であるが、「そこでは1789年来（つまりフランス革命以来
——筆者）のヨーロッパ文学の理念的諸関連も、また文学史や書誌の素材もより
一層完全に取りあげられている。これによって本書が、ヨーロッパの文学的、精
神的諸状態をその内的展開において取り扱い、また同時にその諸状態を事⁽¹³⁾
的に確定しようとする課題の解決に本質的に一歩近づいたと希望するのである」

と言い、こうした第2版を出版することができ、より一層完全になりえたのは読者の積極的参加によるものである旨を述べている。

次いでかれは自分の文学史記述にさいして求めた学的要素を次のように述べ、そのさいに文芸学の表現を用いるのである。「個々の諸現象は恣意的に、また単なる批評的把握に準拠して設定されるのではなく、むしろその時代と国民性の必然的構成要素として国民性の基盤の上で記述され展開せられるであろうという点に、私の他の古代および近代文学史記述の場合と同様に、本書においても私は最初から論述の学的要素を求めたのだった。そのためには諸事実の事実的基礎づけにおとらず、理念的基礎づけが要求される。そして同時に、この目的のためには文学史のこれまでの地平は拡大されねばならなかった。というのは、学問が内的国民運動 (die innere Nationalbewegung) と符合するかぎり、学問の一部もまた必然的に文学史の領域に入らざるをえなかつたからである。文芸学と呼ばれてしかるべきもの、まさにそのものはこうした把握において確立されるのである。」⁽¹⁴⁾

ムントの主張はこの文で明瞭であると思われるが、個々の事象はその事象があらわれた時代、およびその国民性から必然的に生じたものと把握されるべきであり、それらはまた全体としての理念、いわば時代精神とでも言ったもののなかで基礎づけられなければならないとするのである。これはそのまま歴史学派の主張としておそらく許されるであろうが、そのためには文学史記述は単に文学の領域にとどまることができなくなってくる。文学をも含んだ大きな時代の流れのなかで把握される必要があるからである。そしてムントが「理念的諸関連」、あるいは「理念的基礎づけ」と言うとき、かれは明らかに精神史としての文学史の立場にいと見ていいのである。ムントの言う「内的国民運動」は、いわゆる「ドイツ運動」(Deutsche Bewegung) と歴史上呼ばれている、およそ1750年頃から1830年に至る文学的、精神的諸潮流あるいはその残照を意味するものであろうが、学問一般がこの運動と歩みを共にするとき、文学もこの運動の一翼を荷うものであるゆえに、学問が文学のなかへ、ムントでは文学史のなかへ入らざるをえないし、そう把握するとき、そこに文学の学として、文

芸学と呼ばれてしかるべきものが確立されることになるのである。

しかしながら、ここでムントの言う学問という概念は必ずしも明瞭ではないし、また文芸学という表現の含む意味内容も、ムントはその表現で単に文学史への学の要請だけに終始しているように思われるだけに、きわめて具体性にも理論性にも欠けていると言わざるをえないし、今日の文芸学的観点からすれば恐らく否定的評価しか与えられないように思われる。しかしまた、その内実はどうであれ、今日でも語られる「文芸学」はここでその第一歩を踏み出したのである。

こうしたムントの理解する文芸学は、かれの把えた当時の、あるいは過去の文学研究にアンチ・テーゼとして措定されたものであった。そうした文学研究をかれは次のように否定的に把えている。「それ（かれの文芸学的立場——筆者）に対して、無精神にかき集められた資料の集積によって、理念自体よりも、あらゆる原理的展開よりもすぐれていると思込んでいる取るに足らない職人芸は、この領域においても本来の学的営為の評価を得ることはできないのである。」⁽¹⁵⁾かれによって職人芸を事とするとされた人物は誰をさすのかは明らかではないが、そうした職人芸に対して自分の記述方法が有効であったと思う根拠は、この領域におけるかれの後継者の多くの人々や、またかれに個人的に反対した人々もかれの本を相当に用い、意識的にも無意識的にも十分に利用し、場合によっては部分的に抜粋すらした事実⁽¹⁶⁾であるとし、かれに反対できると思っている人達のよすが（Stärke）も、せいぜいかれ自身から汲みとったにすぎないではないかと述べている。こうした事実は、かれの例えば初版の『現代文学史』が当時、この領域でもしたであろう物議を語るものであるし、またかれのこの著作が当時の人々に無視されたのではないことも語っている。

そしてかれは次のような言葉で序文をおえている。「しかし、私の文学史上の努力のかなりの部分が文芸学自体の現代の論述のなかに流れ込んだのを見るとき、それによって、私自身の本をまた完成という目標に次第に導いてゆき、それに加えて私の読者の愛情が提供してくれたきっかけを再び新たな改訂版の形で力の限り利用することは、全く無意味というわけではない開始かもしれな

「という確信を私は覚えるのである。」⁽¹⁷⁾

3

以上のような序文による前提を経てムントは第2版『現代文学史』を書き始めている。さきにのべたようにムントの学問の概念は必ずしも明瞭ではないが、ムントが「学問の一部もまた必然的に入らざるをえなかった」と把える文学史の概念、ひいては文学の概念は本文においては幾分明らかとなっている。かれの文学の概念を知ることはいずれが要請し、かれが理解しようとした文芸学の概念に多少とも光を与えてくれるかもしれない。

かれは当時の文学や国民の精神的文化について述べるさいの出発点は疑いの余地なく明瞭であるとし、それは18世紀の末頃、全ヨーロッパの民族の生を内部からも外部からもゆり動かしたフランス革命であると把えている。かれにとっては「革命は新時代の神話である。この神話を解釈し、この神話のなかに刻み込まれた様々な矛盾を宥和させることは、古いスフィンクスを深淵のなかに投げ込み、自由な人間を人類の玉座にすえることを意味する」⁽¹⁸⁾と、同時代のほとんどすべての人々と同様にフランス革命を高く評価しているが、ムントによれば、国家におとらず文学もフランス革命によってひきおこされた生の内なる闘いや矛盾を自己のうちに受容し、写しとらざるをえなかったのである。「しかしある民族の文学を通して流れているものは、その民族の悩みとよるこびの観念的事象にすぎない」⁽¹⁹⁾と第2版で初版にはない部分を書き加え、国家の仕事に従事し、幸福と存在をたえず犠牲にすることによって、いつも花咲くようにみえて果実は結ばないメルヒェンのおばけの木に結実させるように、国家を実り豊かにしようと努める戦士や党派人の額から流れる人間の汗は文学にはないと言ひ、初版にはない文学観を述べ、多少とも政治的色彩を濃くしている。しかしながら同時に、「我々が文学において諸民族を訪ねることになる大きな国民ホールでは、政治上の争いは沈黙し、大理石の永遠の新鮮さをもつ諸民族の創造的精神の平和の像が我々を取り巻くのである」⁽²⁰⁾とも述べるのである。

文学において我々をゆり動かすものは、民族の力の観念論 (Idealismus) で

あり、国家における様々な営為に関して多くの失敗と多くのはずがしめを自己のなかにこうむった時代のなかで、文学と精神の宝にたずさわることは、民族の力の観念性 (Idealität) を守り育てることになるかもしれないのである。というのは、精神が自己の芸術上の基準で自己に加える以外の暴力、あるいは精神が自己の逆らえない力を完全に意識しておこなう以外の暴力は存在しない自由の国へ、ここで人々はおもむくことになるからなのである。そして、「ここで重要なことは、創造的精神にあらわれた人間の尊厳と人間の偉大さを承認することであるが、最近の嵐と塵芥のなかで、そうしたものを疑うことを学んだ人々には、思想家や詩人をたずきとして、諸民族の生の最も内なる泉を訪ねることは快いものになるであろう⁽²¹⁾」と述べて、いわば文学の自律を謳いつつ文学のなかに民族の生の根源を求めべきであるとし、ローマン主義をも含んだ「ドイツ運動」と異なるものではない道を歩んでいるのである。

そして文学や国民の精神的文化の記述の出発点と同様に、文学の概念もフランス革命による時代の変革と無縁ではありえないとムントは把え、次のように言っている。「……文学の概念もまた我々は、18世紀の最後の2、30年を特色づける、ヨーロッパの精神生活のかの変革から受け継いだものであった。これが、文学的文化 (die literarische Cultur) を直接かかわりをもたない無関係な観念的領域に差し向けたり、ゆだねたりするのではなく、むしろ文学的文化を国民精神の真の現実の具体的構成要素として統一的全体の中に数え入れる、一貫した国民的学としての文学の概念なのである。国家自体がフランス革命を通じてまず国民的になったと同じように、そして国家が国民の生の最高の総体として同時にその最高の価値を得たことによって、近代史のこの同じ事実による近代精神のすべての個々の諸作品は、より密接な相互関連のなかに入り、その真の中点をおのが父であるところの生きた国民精神のなかに認めたのだらた。ルードヴィヒ4世の時代にあらゆる作家達が多少とも王に対してある関係を持たざるをえなかつたと同様に、今や国家と国民的なものが文学の宮廷⁽²²⁾になったのである。」

こうした状況において今や文学は、自由な諸状態の調和に全力を尽くす、ふ

つぶつたる教養志向 (Bildungsstreben) のなかで仲介の要素となるべきものであり、またそのことによって文学の概念は、とりわけ国民的概念に高まっているたのである。文学はすなわち国民精神の真の現実の具体的要素と捉えられ、全体の構成の一部を形成するものとなったのである。国家がフランス革命を通じて国民的となったと同じように、近代的となった精神から産みだされた諸作品も国民的となるべきであり、文学は国家や国民にいわば奉仕するべく、あるいは国民の教養志向に奉仕するべく捉えられたのである。文学はもはや単に個人的芸術行為であることをやめなければならず、その表現は適切ではないかもしれないが、もはや「文学のための文学」であってはならないのである。

以上によって、ムントが文学ということは何を理解していたか、あるいはかれの考えた文学のはたすべき役割は明瞭であろう。そしてこのような文学の捉え方のなかに、芸術時代とされる古典主義・ロマン主義時代とは意味内容を異にする、若きドイツ的、芸術の終焉の時代のはじまりを告げるような文学観の一面を見ることができるのである。

この論議のなかで、ムントの文学観の重要性は、その著述のなかで、その作家としては大して高く評価されることのないムントの『現代文学史』が、この領域においてどの程度に評価されるべきかは今後の詳細な研究を待つ他ないが、一般には完全に無視されてしまっているようである。しかし美学者、エッセイスト、批評家としてはムントは一定の意味を持っているとし、『現代文学史』を「注目すべき記述」と捉える人もいるようである。⁽²³⁾ 近年、若きドイツの詩人達の「身元確認」、再発掘が東西両ドイツでなされてきているという。⁽²⁴⁾ 『現代文学史』も再発掘されるときがあるいは来るかもしれない。

マイヤー (H. Meyer) は、ここではその是非は問わないが、シュレーゲルおよびグリム両兄弟の時代、ドイツにはまだ本格的文芸学は存在しなかったと捉え、文芸学をゲルヴィーヌスの文学史記述でもってはじめさせている。⁽²⁵⁾ またクルツィウス (E. R. Curtius) は、「我々は学校には見切りをつけて問うてみよう——いったいヨーロッパ文学に関する学問はあるのだろうか、そしてそれは大学において行なわれているのだろうか、と。もちろん半世紀このかた『文芸

学』(Literaturwissenschaft) と称するものがある。それは文学史とは別の、それ以上のものであるという……」と述べたあとで、この文芸学と他の諸科学との接触を語り、文芸学はまさに一つの妖怪であると言っている。たしかに、妖怪とされた文芸学の正体は不明で、その概念はあいまいである。個々の学者によってもその意味内容は異なるであろう。例えばそれは、『文芸学入門』と銘うったドイツのゲルマニストの本が、あるときは文学の諸形態の説明を目的としていたり、あるときは文学の方法論の概観を目的としていたりする事実にも看取することができる。文学を一義的に把えることは厳密には不可能であるが、それゆえにこそ文芸学も一義的ではありえないのかもしれない。

その内実はたしかに豊富であるとは言えないかもしれないが、ムントによって語りはじめられた「文芸学」は、それに代る表現も生じないままに多くの文学研究者の語るところとなって現在まで生きながらえてきている。その意味では、ムントの「文芸学」はたしかに「無意味というわけではない開始」であったと、ムントと共に言うことができる。そして本稿にも多々あるムントに関する未詳の点は、今後の「身元確認」作業を待つ他ないのである。

注

- (1) マールホルツ『文学史と文芸学』(角田俊訳 天人社 昭和5年) 6頁。
- (2) 文学史記述のはじまりについては、日本独文学会の「ドイツ文学」56, 57(1976年)に報告されている。
- (3) ゲルヴィーヌスに関しては次の論文を参照。関徹雄「ゲルヴィーヌス文学史のいわゆる学問性について」(「ドイツ文学」59 1977年)。なお本稿10頁を参照。
- (4) 本文でも後にでてくるが、初版の『現代文学史』はベルリンの M. Simion から出版された。第2版はライプチヒの M. Simion である。
- (5) 第1巻 39頁。
- (6) K. O. Conrady もその „Einführung in die neuere deutsche Literaturwissenschaft“ (Rowohlt, 1966 S. 25) でこの誤謬を指摘しているが、このことはドイツでもこの誤謬が一般的であることを語るものであろう。
- (7) 同書の XLVIII 頁。
- (8) 『現代文学史』のとびらに書かれている。
- (9) 第1版4~5頁。
- (10) 第2版63頁。

- (11) 第2版110頁。
- (12) 第2版111頁。
- (13) 第2版の序文による。
- (14) (12)と同じ個所。
- (15) (12)と同じ個所。
- (16) 具体的に何処かは未詳である。
- (17) (12)と同じ個所。
- (18) 第1版2頁, 第2版1~2頁。
- (19) 第2版2頁。
- (20) 第2版2頁。
- (21) 第2版2~3頁。
- (22) 第2版3頁。
- (23) Ernst Alker: Die deutsche Literatur im 19. Jahrhundert, Kröner Verlag, 1969 S. 60.
- (24) 次の論文による。林睦実「≪青年ドイツ派の諸相≫特集にあたって」(ドイツ文学] 58, 1977年)。
- (25) Das Fischer-Lexikon: Literatur II, 1/2. Hrsg. v. Wolf-Hartmut Friedrich u. Walter Killy, Bd. II, I, S. 318 ff.
- (26) クルツィウス『ヨーロッパ文学とラテン中世』(南大路振一・岸本通夫・中村善也共訳 みすず書房 1971年) 11頁以下。

なお、邦語文献としては特に次の二つの論文を参照させていただいた。

「現代獨逸文藝學の諸傾向とその批判」(奥津彦重『獨逸文學』第三輯 郁文堂書店刊行 昭和3年)

「廿世紀初頭における『文芸学』の展開」(中島勝「文芸研究」第19号 明治大学文学部紀要 1968年)